

《ご退職の先生からのメッセージ》

私の研究と人生のなかの断片的記憶を重ねて

—これまでの3/4生記を振り返りながら、これからを見つめてみる—

浅井 春夫

ASAI, Haruo

はじめに—自らのために書いてみる—

19年間、お世話になった立教大学コミュニティ福祉学部を定年退職するにあたって、学部の『紀要』に書くようにと、木下武徳編集長から再三にわたっていいないな依頼があり、「退職記念講演会」の開催や過分な「贈る言葉」「研究業績の評価」をいただくのは、「私の趣味ではないので…」と、お断りし続けたのだが、気持ちを切り替えて自分自身で“自分のために書いてみる”ことにした。

木下先生には、何度もいいないに、心のこもったお声かけをしていただいたことに、あらためて感謝を申し上げる。

私の使った「趣味」という言葉の意味を誤解のないように補足しておく、「どういふものに美しさやおもしろさを感じるかという、その人の感覚のあり方」のことである。私はそうした意味での「趣味」を人間の付き合いのなかでも大事にしてきたつもりである。その点で感覚のあう人たちと生きてきたように思う。

小稿は、私自身の研究の歩みと人生のなかのときどきの記憶を結んで、なぜ自らがどのような研究課題にチャレンジしてきたのかを整理してみることも、退職後のために必要と考え、思いつくままに素直に書いたものである。情緒的な文章というご批判を受けるかもしれないが、こうした文書は素直に淡々と思いつくままに書くことがいいと思う。

記憶には、さまざまな要素がある。意味記憶とエピソード記憶、短期記憶と長期記憶などの種類があるが、私の体験的な記憶分類でいうと、視覚に基づいた記憶、臭いを通しての記憶、音からの記憶、文字を通しての記憶などがある。何度も想起した記憶の再構成でもある。それは現在の私の考え方・思想・スタンスなどを通しての記憶の呼び戻しと再構成でもあり、自らの未来の見つめ直しという側面を持っている。

1. 65年を生きて想うこと

こんな表現は大げさに思われるかもしれないが、ここまで生きてくると、父母や祖父母、恩師はもちろんのことだが、人生の一時期をともにした先輩・同輩・後輩たちを見送ることも少なくない。高校の同輩、大学の寮生活でさまざまな体験を共有した仲間たちも幾人も亡くなっている。ここまで病気もしながらではあったが、まずは無事に生きてきた自分をほめてあげたいと思う。

そして、死者を悼むことが生者の背負うべき役目とを感じるようになってきた。

多くの方々に導かれ、助けられ、あたたかく見守られ、ときには叱咤されながら、納得の人生をここまで生きてきたことに、みなさまに心からの感謝を述べるものである。

開拓村に生まれて

1951年8月8日に、京都の開拓村（当時）で私は生まれた。当時の記憶はまったくない。50数年ぶりに再会した血縁の父親の話では、2歳すぎまで、その家に居たとのことである。白い三輪車に乗って遊んでいた私のことをよく覚えていると話していた。

私の記憶の1ページは、母の腕に抱かれて、ケーキをスプーンで食べさせてもらっている場面である。3～4歳だったであろうか。アパート（共栄荘）の2階で、母親の友人が二人、一緒にその場にいた。京都の山奥の開拓村で母は17歳で私を産み、その後、京都市内に出て、再婚した“育ての父”と暮らすようになった。そのアパートは空き家だが、いまでも昔のままの入口の看板も残っている。

京都での暮らしのいくつかの記憶の断片を掘り起こしてみると、ひな祭りでおひな様が飾ってあるのをどこかで見た私が、「ボクもほしい！」とせがんだことがあった。母は「ひな祭りは女の子のお祝いなんだよ。男の子のお祝いの日はもっとあとにあるの…」と教えてくれたのだが、私は駄々をこねたままであった。翌朝目覚めると、タンスの上に、茶碗を二つ伏せて、そのうえに卵にクレヨンで男女の顔をきれいに描いたおひな様を作ってくれていた。私にとっては納得のおひな様であった。

またあるとき、朝鮮人（と思われる）の子どもが、石炭が山積みされている頂上から、おもちゃの拳銃を持って、私に「アチョパチョバイ！」（と子どもの私には聞こえた）と言って、威嚇しているように感じたことがあった。子どもなりに悔しさもあって「手を挙げろと言ったんだよ」と母に話した。「それはあなたと遊びたいと言っているの。ケンカをしたいんじゃないのよ」と、優しく話してくれたことを覚えている。その話で子ども心に抱いたちょっとした憎しみ・敵愾心のような気持ちがすーっと溶けたことを覚えている。

その母は、朝鮮人の男性留学生と日本人の祖母の間に生まれた子どもであったことを、私が40代になってから知った。開拓村での血縁の父との共同生活から、私を連れて逃げ出した。10代の女性である母にとっては開拓村での暮らしは、困難に満ちた厳しいものであったに違いない。

育ての父は、17歳のとき大久野島という戦時中に毒ガス兵器を製造していた秘密地帯に徴用されていた。そのせいで肺がんを患い、最期は肺気腫で亡くなった。

私には二つの小さな手帳が残された。ひとつは「ガス障害者手帳」（医療保険）であり、もう1冊は家族と日常の暮らしの基礎情報を綺麗な字で書いた手帳であった。

「ガス障害者手帳」をはじめ手にした私は、父が戦後何十年たっても戦争の後遺症で苦しんでいる人間がいることを忘れるなど、遺言をしていると感じた。

もう一つの手帳に書かれてあった2行の記述で、私は自らの生まれた実家を50数年ぶりに訪

れることができた。旧住所であったが、何とか私の出発点である家と血縁の父親と再開したのである。育ての父はどんな想いで、この手帳に、小さく住所と名前（開拓村に入植した祖父）を書き込んでいたのであろうか。病院で亡くなる数日前に、自分が死んだら、ベッドの柵にタオルで縛り付けていたこの手提げバッグを開けると言い残していた。

私がここまで生きてきたのは、私と連なる家族が背負ってきた歩みの延長線上にあり、人は家族を中心に多くの人々に支えられ生きている。それぞれの人生をどう歩んできたのかを語ることは、これからの人生の歩み方にも関わってくる。一人ひとりがいまの時代をどう生きるのかを自らの人生を顧みながら考えてみたいものである。

子どもには子どもの決意がある

育ての父と京都市内で先にふれたアパート暮らしをするようになったが、小学校1年のときに、父親の実家の地元である広島県福山市の市営住宅に引越しをするようになった。それぞれがどのような人生を送ったのかを聴かないまま、夫婦は私が小学3・4年のときに離婚し、私は父方の祖母に育てられた。祖母はまさに母親代りとして育ててくれた存在であった。

小学校4年生だっただろうか、あるとき祖母に「お母さんはどこにいるのかなあ？」と聞いたことがある。子どもなりに“意を決して”尋ねた記憶がある。祖母は「お母さんは遠いところの病院にいて、いまは帰って来れないんだよ」と言って、顔をそむけて涙を拭いていたことを覚えている。子ども心に、聞いてはいけないことがあることを知った。それ以来、母親の行方について、祖母に尋ねることはしなかった。子どもには子どもなりの判断と決意があるのだと思う。私はそれ以来、母のことは忘れることにした。

念のためにいっておくが、私は自らの人生を不幸などと思ったことは一度もない。むしろ祖母に育てられたことは、私の人生にとって幸運であったと、つくづく思うのである。

耳底の記憶と映像の記憶と物語の記憶

児童養護施設に勤務したこと、研究のテーマの発見は、たまたまではなく、私の人生の歩みと重なっていることを、この原稿を書きながら感じている。

耳底に残る記憶といえば、ラジオ番組「鐘の鳴る丘」(1947年7月から1950年12月までNHKラジオで放送。初年は毎週土曜日と日曜日の午後5時15分から15分間の放送だったが、翌年からは月曜日から金曜日の連日放送へと変更。1947年から600回放送)を聴いていた。私は1951(昭和26)年生まれで、直接聴けるはずもないのだが、聴いた記憶がある。聴こえにくいおんぼろラジオに、祖母とともに耳を傾けた記憶である。あの歌の記憶は、放送後に何年もたった後のドキュメンタリーなどの伴奏に使われているものの記憶であったかもしれない。どうして私の音声の記憶になったのかはわからない。

ちなみに、ラジオ番組「鐘の鳴る丘」は、GHQ民間情報教育局がNHKラジオに対して、フラナガン神父の精神を踏まえた戦争孤児救済のためのキャンペーンドラマを制作するように指示し

たものである。アメリカの占領管理下における文化政策の一環であったことも事実である（勝又浩『「鐘の鳴る丘」世代とアメリカ』白水社、2012年）。

それとテレビでは「記念樹」（児童養護施設を舞台にした物語で、1966年4月～67年2月に、30分ドラマを全46話で1年間放映）という番組があった。

テレビは、父親が祖父母のために、とくに祖父は病気で寝たきり状態であったので、横になりながら楽しめるためにと買ってくれたものであった。市営住宅（5家族×3棟）のなかでテレビがあったのは我が家だけであったので、1959（昭和34）年4月10日の皇太子と美智子さんの結婚式とパレードを多くの方が正座でテレビを見ていたのを覚えている。たしか小学2年生のときに、テレビが入ったと思う。祖父は私が小学3年生のときに亡くなり、それから高校2年生までは、祖母と私の二人での生活であった。

調べてみると、横浜にある実在の児童養護施設が舞台で、「一本のさくらの木によってかたく結ばれた養護施設の保母と子供たちの15年にわたる愛の記録を描いたドラマ。15年前、横浜の養護施設の園児たちは、結婚して施設を去ることとなった一人の保母に別れを告げた。やがて時は流れ15年ぶりに再会した保母に、教え子たちは様々な問題を投げかける。毎回様々なエピソードを通してヒューマニズムに満ちた世界が描かれる」と紹介されている。主演の保母（当時の名称）は、馬淵晴子、高杉早苗が務めており、各回の子ども・青年、関係者の登場人物には当時の若手ホープである田村正和、江守徹、小坂一也、関口宏、中野誠也、石立鉄男、寺田農、山口崇、吉行和子、吉田日出子、佐々木愛、日色ともゑ、渥美清、原田芳雄などのそうそうたるメンバーが各回のドラマに出演していた（http://www.tvdrama-db.com/drama_info/p/id-9390）。しかし登場人物の顔はまったく記憶にない。

しかし30分ドラマの記憶は、中学生の私にとって、中学卒業で社会に出る子どもたちの困難・悔しさ・切なさ……を感じ取り、物語を通して現実の社会の醜さと、それでも懸命に生きる人間のけなげな勇気ある生きざまを学ぶ内容であった。職員と子どもたちの関わりにも、人間が人間らしく生きることの大変さと美しさを感じていた。まさか自分がそうした現場の職員になろうとは、考えもしなかったのだが…。

連続テレビ映画・木下恵介劇場「記念樹」の主題歌は、私が就職した児童養護施設・調布学園で、卒園式や子どもが学園から再び家族のもとでの生活に戻る際に、アコーディオンの伴奏で子どもと職員が歌っていた。不思議な縁を感じる歌との再会であった。

「記念樹」主題歌

さくらの苗が大きく育つ頃 僕らはみんな大人になるんだ
あいつとこいつ あなたと私 真赤な頬っぺは しているが

日照りのときも 冷たい雪の日も 負けたら駄目だけ 僕らの夢は

いつでもお前と 仲良しこよし 空までぐんぐん のびてゆく

嬉しきゃ泣いて 悲しきゃ笑うんだ 仲間がみんな 見てるじゃないか
それでも淋しきゃ 大きな声で 呼んでみるんだ 「母さん」と

冷たい風は 僕らをためすのさ 白い粉雪は 花びらのさ
泣いたら駄目だぜ そこまで春が 来てるじゃないか 手を伸べて

児童養護施設に勤めたのも、そんな耳底に残るかすかな記憶や映像などが影響していたのかもしれない。

高校1年生の坂道での記憶

小中学校はほとんど勉強もせず、学習塾などに行くこともなく、外で遊び、クラブ活動に打ち込む日々であった。それなりの成績を維持しながら、中学3年生、高校3年生になって成績を急上昇させることで（上がるだけの余地が十分にある成績の位置にあったということである）、担任には「やればできる子」などと最終学年では持ち上げられる子どもであった。だいたい私だけでなく、当時子どもたちは先生からみんなそう言われているようであった。

高校は、市町村合併がされる前は、市内で唯一の高校で、普通科と家政科があり、定時制を併設している学校であった。自由でのびのびとした雰囲気の高校であった。

私は軟式テニス部に所属して、これまた勉強は適当に青春を謳歌する毎日であり、楽しい高校時代を歩みだしていた。クラブ活動が終わると、いつも数人で話をしながら、駄菓子屋に立ち寄って帰るのが常であった。高校の門を出ると、ちょっとした坂道が続くのだが、私たちがしゃべりながら坂を下っていくと、途中で道を登ってくる女子学生とすれ違うのである。その女子学生は同じ中学校の卒業生であった。彼女は定時制に通っていた。確か中学ではソフトボール部で、目のくりっとしたかわいらしい子であったが、とくに恋心を抱いていたわけでもなかった。

ときどきその女子学生とすれ違うときに、楽しくしゃべりながら下校している私たちと、仕事が終わってひとりで、伏し目がちに登校をしてくる彼女というそれぞれの立場に、私は後ろめたさを感じるようになっていた。この社会の不平等を私なりに感じていたことははっきりと自覚していた。2年生になるころから、ほとんどすれ違うことはなくなっていた。

高校時代の読書のなかには、マルクス、エンゲルスの『共産党宣言』（1848年刊）や島崎藤村の『破戒』（1906年刊）などの社会派の傾向の本を読んでいた。前者の内容は、用語が難しくまったく理解できていなかったが、社会には根本的な矛盾があることに関心を持つようになった。

それらの本を読みながら、塩瀬信子『生命ある日に一女子学生の日記一』（青春の手帖社、1962年初版）のなかにある詩に感銘を受けたことも大きな意味を持っていた。数行の詩から、人間は生き方を見つけるときもある。

私の夢

それは 私がうけたものを
社会に返すこと
社会のために何らかのことをすること
私という人間が
長い歴史の一瞬間に
生きた意味のあるように。

その本に惹かれたのは、高校生の塩瀬信子の写真があり、そのなかに母親の面影を見出していたこと、そして塩瀬の生年月日が昭和16年8月8日で、誕生日が同じで私よりちょうど10年先に生まれていることであった。

「いのちの尊厳のために」は、学部理念であるが、私自身も考え続けてきた基本姿勢でもある。高校時代は、社会の格差に関心を持ちはじめ、人生観を培っていくうえで重要な時期であったと思う。高校時代は“雨降り文芸部員”で、雨天でテニスコートを使用すると、晴れるとコートが凸凹になって使えなくなるので、雨の日のクラブは休みになる。その日は、文芸室のクラブボックスで、文学に関する勝手な持論を展開するのである。文芸部の雑誌『赤舌』に、私も詩や『破戒』のその後—主人公の瀬川丑松が新天地を求めて、テキサスに向かうのだが—を書いてみたりした。文章を書くことが好きになったのは、このころの書く楽しさの体験と自己満足感が大きかったのではないかと思う。

高校2年生のM君のカミングアウト

1968年、高校2年生の夏休み前だったと記憶しているが、私にとっては衝撃的な出来事があった。小学生のときから、一緒にあそび、お互いの家をよく行き来していた友だちのカミングアウトであった。彼は父子世帯で、私は祖母との市営住宅での暮らしであったこともあり、何となく気のあう友だちであった。そのM君は、中学も、高校も同じところに通い、彼は生徒会などで、私はクラブ活動でそれぞれの高校生活を送っていたが、2年生で同じクラスになった。部落問題や学園紛争などについて、クラスで語り合うこともあり、高校時代は、社会問題に目覚めた時期であった。

ある日、M君は、ホームルームの時間に突然前に出て「みんなに聞いてもらいたいことがある」と前置きをして、自らの生い立ちを語り、在日韓国人であることをカミングアウトした。これからはMという日本名ではなく、韓国名の姓で呼んでほしいことを、気迫を込めて訴えたのである。その言葉を聴きながら、彼がときどき見せる表情に、深い闇を感じることもあったが、その苦しみを受け止められないでいた自分自身の不甲斐なさに落胆をしたことを覚えている。3年生になると彼は就職クラスになり、だんだんと疎遠になっていった。

彼は卒業後、関西に行き、ドヤ街で寄せ場労働者の労働運動に身を投じたのだとうわさで聞い

た。ドヤ街のドヤとは、「宿(ヤド)」の逆さことばであり、日雇い労働者が多く住む街のことで、簡易宿所が多く立ち並んでいる街・地区のことである。

だが、M君の行動は、私にとって人は何かを抱えながら生きており、その間には踏み込めないものがあるのだという“心理的挫折”体験であった。私にとって、どの民族であろうと関係ないではないかという心情があるが、踏み込めないものがあったとしても、人のためにできることはあるのではないかという想いを引き出したことも事実である。人間のいのちと生きざまに深くかかわる福祉分野への道を考える遠因になったのかもしれない。

高校の同窓会の折に、「浅井君らしいわね、福祉の道へ進むなんて。そんな感じだったよね」と、思いもよらない声をかけられたことがあった。“東洋の魔女”を率いた女子バレーボールの大松博文監督のサイン「闘魂」を部屋に飾っているような、バリバリの男ジェンダーを背負って生きていたので、その言葉は意外であった。自らの生い立ちを受け止める勇気や支えてくれた人々、さまざまな出会いのなかで、いまある研究者の道を歩むことになったのかなと思うことがある。人生はいろいろな人との出会いで、方向づけられるのかもしれない。

自らの生い立ちや親との関係は、人間を縛ってしまう面もあるが、その呪縛からどう抜け出していけるのかも人間の人生には問われていると思う。児童福祉のしごとは、そうした課題への立ち向かい方が問われる職業であると思っている。

いまM君はどこにいるのか、何をしているのか、まったくわからない。万が一、会う機会があったら、あれからどんな歩みをしたのかを語りあってみたいものである。ただ彼はそう簡単には語ってはくれない人生を送ったことだろうと思う。もし会えたら、私は「君と同じ境遇であったけれど、多くの人に支えられながら、信念に沿って生きてきた」と、自信をもって伝えたいと思う。同時にあの時の私は、君のことをわかるだけの友人ではなかったことを詫言いたいと思う。

大学入学後すぐの学生寮事件

入学が決まって、私は学生寮に入ることになった。当時、龍谷大学には4つの学生寮があり、私は伏見キャンパス内にある東寮に入寮した。戦後、進駐軍が使っていた建物を学生寮にしたもので、洋式便所を和式に改造し、2段ベッドが2つ各部屋に備え付けられていた。4人部屋が20部屋以上はあっただろうか、100人近くの寮生がいた。

入寮して1カ月余りが経ったとき、夜、学生服を着た体育会の学生が土足で乗り込んできて、新入生を2階の講堂に集めて、恫喝をしてきた。2年生は6名が継続して残っており、その人たちが学生寮の民主化運動をすることへの妨害であった。

2年生の一人がその暴漢に勇敢に抗議し、彼らは学生部の職員に促され、すごすごと出て行った。その事件があったことで、寮の民主化運動に一気に火が付いたのである。強制的な宗教活動の廃止、舎監による管理ではなく、寮生の自治組織による運営への転換など、私たち1年生をまき込んで運動は大きく盛り上がり、私たちの暮らしは私たちが運営するという寮生自治会を結成し、大学当局に認めさせることとなった。

あわせてその年の6月23日は、70安保のデモに、1年生の岩田和郎君や私が一緒に結成した「平和と民主主義を考える会」の緑の旗の下にほとんどの寮生がデモ行進に参加をしたのであった。それ以来、いくつの団体、研究会を立ち上げたであろうか。

闘うことなしに、民主主義は我がものとはならないことを、こうした出来事から学び取ってきた。私にとっては、闘いは人間としての誠実さの行動化である。今年の1月末に、高校教員であった岩田和郎君と山口でお会いして、私たちはあの時代を共有する青年期を送ったのだなあと、しみじみと思った。

大学進学と福祉への関心

大学進学の意味があることを伝えると、父は「あなたが本当にやりたいことがあれば、その道に行きなさい」と言ってくれた。私が受験勉強で、ラジオ講座を聴いていたことを知っていたので、そっと聞きやすいラジオを買ってきて、深夜に渡してくれた。眠たさにも打ち勝つことができた。「オールナイトニッポン」を聞きながら明け方まで勉強をして、少し寝て、登校する日々であった。

大学は龍谷大学法学部をめざした。それは労働法の泰斗であった浅井清信教授が同大学にいたことが大きかった。3・4年の専門ゼミでは、大変お世話になった。私の卒業論文のテーマは、労働裁判に関わる内容であったが、正確な題名は忘れてしまった。労働者のための仕事をしてみたいということが根底にあって、労働法をめざしたことは確かである。

しかしボランティアサークルで活動をするなかで、社会福祉への関心が高まってきた。当時は、文学部に社会事業論の孝橋正一先生もおられて、他学部の学生が福祉を学ぶ機会もあった。

当時はまだ、福祉系学部・学科などにおいても実習指導の時間や大学が実習先をあっせんするというしくみはなかった。ボランティアサークルでは、自主的に実習先を見つけてお願いをし、キャラバンと称して、グループごとにキャラバン隊をつくって実習に行ったものであった。

兵庫県の山奥にある青野ヶ原にある重症心身障害児病棟に訪問するグループ（5～6人）に私は属して、5日間程度の自主的な「実習」を体験した。

青野ヶ原にある重症心身障害児病棟の沿革をホームページで確認すると（http://www.hosp.go.jp/~aono/about/cnt0_000004.html、2017年1月10日閲覧）、以下のようである。

1945（昭和20）年12月：元大阪第二陸軍病院が終戦により厚生省に移管され、国立兵庫病院として発足

昭和22年4月：国立療養所兵庫病院と改称、結核療養所となる

昭和27年4月：国立青野原療養所と改称

1969（昭和44）年3月：重症心身障害児病棟開設

現在は、独立行政法人国立病院機構兵庫あおの病院と改称

私が訪問した時は、1971年だったので、重症心身障害児病棟開設をして、間もない時期であった。ケアの中心を担っていたのは准看護師の若い女性たちであり、福祉援助を担当していたのは、一人の保育士さんであった。私たちが訪問する直前に、その方は病院から退院して、仕事に就いておられた。片足を引きずりながら仕事をされており、当時の重症の障害児施設では子どもの移動を、職員が抱っこして行くことで、多くの方が腰痛症を患っていた。

その保育士さんも重度の腰痛症で、「2度入院しているので、3度目の入院になると、子どもが産めないからだになるよ、と医者から言われている」と、話されていた。私は「どうして、そこまでされるのですか?」と、批判的な心情を込めて質問したことを覚えている。その答えは、「3度目の入院の1日前まで働いて、それでこの仕事を辞めます」という物静かな返答であった。その決意に圧倒されながら、同時にこんなに職員さんの自己犠牲によって成り立つ福祉現場でいいのかというのが私の抱いたやりきれない疑問であった。

このことが福祉分野での仕事と研究を私が考えるようになった直接的な出来事であった。職員さんを犠牲にしない福祉のあり方を考えなければならないという問題意識が、私の福祉研究の出発点であった。人は一瞬の場面や言葉によって人生で歩むべき道を探り当てる時がある。

いまも病棟に入ったときのクレゾールとウンチが入り混ざった臭いととも、保育士さんが足を引きずりながら歩いている姿が、40年以上も前だが私の脳裏に焼き付いている。

こうしたサークル活動の体験もあって、法学部を卒業するに際して、とりたててやりたいことが見いだせなかったこともあり、日本福祉大学3年次編入をすることにした。

3・4年次で社会福祉を一から勉強し、専門演習ゼミは小島健司先生(賃金論の研究者で、総評・太田薫時代の調査部長を歴任。日本福祉大学では学監を歴任)の下で、3年次では賃金論、4年次で社会福祉労働論を研究することになった。社会福祉労働論は、先述したボランティアサークルのキャラバン隊での重症心身障害児施設での体験が、このテーマに向かわせたことは明らかであった。社会福祉労働論は、上からの政策と下からの国民要求がぶつかる現場という磁場を捉える理論であり、労働現場にこそ権利としての福祉を発展させる原動力(相対的独自性)があることを解明する脚光を浴びた理論であった。再び社会福祉労働論の研究に着手することも、私に残された宿題である。

大学3年生での沖縄に初上陸―衝撃の光景がそこにあった―

『まなびあい』(第9号、2016年11月)に執筆の拙稿「信じる道をひたすら歩むのみ」を参照していただければ幸いである。

児童養護施設の指導員として

大学院社会福祉研究科修士課程を修了して、1年間の研究生期間を経て、東京の児童養護施設に就職することとなった。修士論文の作成過程で、現場に足を運ぶことが多かったが、そのなかで出会った児童養護施設・調布学園の指導的な職員に、「私が組合の専従に2年間従事するので、

その期間を勤めないか」というお誘いであった。10名を超える圧迫面接を経て、私は就職することができた。そして就職1年目で、先輩職員であるパートナーと出会い、結婚をした。

しごとではいろいろなことがあったが、一人の子どもが神経芽細胞腫という小児がんで亡くなったことが悔いの残る唯一の出来事であった。その子は、両親から虐待を受け、片目は失明、もう一方の視力は0.03程度であった。箸のような鋭利なもので、目を刺されたことによる失明という医学所見であった。背中には、たばこを押し付けた火傷の痕、そして全身に何か所もの骨折をした子どもであった。

その子が私たちの施設に入居して、私の担当する幼児寮に入ることになった。数か月のうちに、元気ではしゃいでいた子が、なぜか日中からゴロゴロとするので、かかりつけ医に診てもらったら、大きな病院へすぐに行くように指示をされ、急遽、入院となった。

みるみる容態は悪くなり、お腹も膨らんできた。看病をしてほしいと、母親に頼み込む若き日の私の姿は、編著『汚れなき戦士たち』（あいわ出版、1987年）に詳しく書いている。

その子は5回目の誕生日を迎えることなく、人生を閉じてしまった。命日は、1月23日で、その日は少しの時間でも、その子のことを想いだすことにしている。いま執筆をしているこの日が命日である。

その子の戒名と同じ「優花」という名の花屋さんが家から駅までの道に開店したことがあった。それは早逝した彼女が「私の分までがんばって！」というエールのように感じたことも確かである。亡くなった人が忘れられてしまうことは寂しいことであろう。死に関わった人間にはその人を忘れないでいる人間的な義務がある。戦争での犠牲、1.17、3.11などの震災（関連）死、自死、病死、事故死……など、生きる者がその人を忘れないでいる義務があると思う。

父母から虐待を受けて、マンションの6階から飛び降りて、自転車置き場の上に落ちて、命拾いした子どもがいる。その子が背中を見せて、落ちたときのけがのあとを見せてくれたことがある。16人の学童寮で、12人までが親からの虐待を受けた子どもたちがいた時期もあった。

子どもの虐待問題への関わりを持ったのも、こうした子どもたちとの出会いがあったことによる。あるとき、「埼玉子どもを虐待から守る会」で一緒に活動をしていた奥山真紀子医師（現在、国立成育医療センター副院長、こころの診療部部長）との話でわかったことがあった。それはこの子のケースに、虐待の事実確認と治療をしたのが2009年に58歳で早逝された坂井聖二医師（1991年設立当初より「子どもの虐待防止センター」の運営に参加し、同センターの理事長も務められた）であり、入院中の担当医であったインターンが奥山医師であり、児童養護施設で担当したのが私であった。この子が私たちを児童虐待問題に向かわせたのだと、飲みながら話したことがある。そう信じて生きたいと思う。

今の自分を形成するうえでの体験と記憶

ここまで書いた半生記というより「3/4生記」（2015年の日本人の平均寿命は男性が80.79歳、女性が87.05歳ですので、人生85年時代にあるので）をみてみると、まさにさまざまな人と場面

との出会いが、我が人生のなかで歩む道を誘導してきたことを感じる。そのことは自らの非力を顧みずに率直に言えば、事実・現実・真実に向かい合ったときに、それらから逃げずに忠実に生きてきたという自負でもある。

さまざまな体験と人間関係に恵まれることも幸運であったが、その体験を記憶し、それらを重ねることで記憶を思想に結実させることを通して、自らの行動に昇華させることができるかどうかは、いかに生きるかという人生観と生き方のちがいにも関わってくることである。

1970年に大学に入学し、1年生の「文献購読」(1年ゼミ)の授業で、小倉襄二著『社会保障と人権』(汐文社、1970年)をテキストに、たまたま私が担当した章が「朝日訴訟」であった。朝日茂の生存権をめぐる闘いに、何を人間が信念をもって守り抜かなければならないのか、譲ってはならない思想とは何かを考えさせられたことがある。人権を守る運動の人間らしさを学んだのも大きな意味があったと思う。あとで知ることになるのだが、朝日茂が日本共産党員であり、療養所でのいのちをかけて活動を続けたことに驚きとともに敬意の念を抱いた。あれほどの闘いに向かわせた思想とは何か、青年の私には何かを突き付けられた想いがした。朝日茂が亡くなった後、茂氏の養子となって裁判を引き継いだ朝日健二氏とも出会うことがあり、その誠実な姿勢と語り口に感銘を受けたことを覚えている。人間の醸し出す誠実さは、口先ではないことを学ぶことが多くあった。反省反省、また反省!

2. 拙著の内容を通して、研究の歩みを振り返る

論文・論稿・報告などは、その時々を書いてきたので、ここではそれらの論稿を所収あるいは書き下ろした拙著(単著および編著)の出版内容を踏まえて、私の研究の歩みを概略的に紹介しておくことにしたい。

【1984年から1990年中盤まで】は、児童養護の実践現場で培ってきた問題意識をベースに必要なに応じて執筆した論稿を著書としてまとめている。その柱は、養護実践と社会的養護の動向に関する論稿である。養護実践に関しては、子ども虐待問題と施設における性教育実践に力点を置いている。この時期、1982年に“人間と性”教育研究協議会(略称:性教協)が設立され、山本直英さんのお誘いで第1回全国セミナー(東京)に参加している。2年後の1984年には、性教協・児童養護施設サークルを全国の現場の方々とともに結成をしている。1984年にはじめての著書(編著)を出版しており、もう30年も書き続けていることになる。

その本が「朝日新聞」で取りあげられ、その記事を見たという女性が勤務先の施設に電話をかけてきて、「浅井さんは生年月日はいつですか?」からはじまり、20数年ぶりに親子であることを確認した。実際に再会したのは数年後であった。

論稿がはじめて活字になったのは、修士課程1年のときに書いた「社会福祉労働論の現代的課題—その研究史からのアプローチ—」(日本福祉大学社会福祉学会『福祉研究』第38号、1978年)であった。当時は70年代前半の社会福祉労働論の熱狂的なブームから、その実践的運動的な有効性が問い直される時期であり、あらためて社会福祉労働論の運動論的な意義と理論の発展方向を

探ったものであった。その拙稿をお二人の先生から褒められたことで、書き続ける出発点となったように思う。

【1990年代後半から2000年代前半まで】は、新自由主義に立脚した社会福祉基礎構造改革、児童福祉改革、公的保育制度の市場化・民営化が強引に進められる時期であり、その課題に焦点をあてて批判的論稿を書いている。確か1998年4月の朝日新聞の論壇に、基礎構造改革は日本の社会保障・社会福祉をどこに導くかについて、6点にわたって指摘したが、ある先生はそうした論調は「世論をミスリードする」と言われたとのことである。現段階での現実、残念ながら私が指摘し予想したとおりになっている。問題は予想が当たったかどうかではなく、予想をしたうえで、国民の権利を守る有効な運動と研究、政策提言ができたかどうかである。抗うことはそれなりにやってきたのだが…。

この時期は、次世代育成支援の国・自治体での計画策定が行われる時期であり、私もいくつかの県・自治体の策定委員会の委員を務めた。行政側はおそらく扱いにくい委員だったに違いない。シンクタンクの作成する計画や方針をベースに論議しては、住民主体の行動計画など立案できないことを繰り返し主張してきた。まず私たちが計画の内容を提案するところこそ住民参加の土台が作られるのである。とくに新座市の「行動計画」づくりは、多くの策定委員が主体的な役割を果たし、行政側も住民の要望や提案に応えようという姿勢をもって、緊張感とともに充実した委員会であった。

【2000年代中盤から現在まで】は、①性教育・セクソロジー分野では、研究のバックボーンになる理論形成の必要を感じているなかで、性的発達論や性の人権などに関する問題意識をもった研究をすすめてきた。今後も引き続き研究をすすめ、『人性学（セクソロジー）入門』をまとめたいと考えている。

②この期は、「子どもの貧困元年」といわれる2008年に共編著『子どもの貧困』（明石書店）を出版し、それを契機にこの問題に関する単著などを出版してきた。現在の問題意識は、子どもの貧困をいかに具体的に解決していくのかという本気度が問われているということであり、解決策を提示することをめざしている。

③沖縄戦と孤児院に関する研究は、2011年度に研究休暇で1年間を沖縄県宜野湾市に在住し、沖縄国際大学に研究員として受け入れていただき、文献研究と聞きとり調査をおこなった。普天間基地に隣接した（10メートル程度）アパートに暮らすことで沖縄の現実の一端を体感することができた。沖縄の方がほとんど研究対象にしなかった孤児院と戦争孤児の研究に本格的に着手することができた。今後は『続 沖縄戦と孤児院』をまとめること、とくに14か所余りあった孤児院の全容を明らかにすることは、私自身が担う研究課題である。昨年11月には、「戦争孤児たちの戦後史研究会」を20名の仲間たちとともに立ち上げ、全国各地で開催する巡回研究会を計画している。④として、③とも深くかかわるが、戦争を福祉（福死）の観点から問い続けることも私の課題であり、残りの人生でライフワークとなっていくものと思う。⑤「する国・しない国」は当初から3部作で考えてきた。すでに子どもと戦争は書いてきたので、残りは『人間を大切にす

る国・しない国』の執筆をめざすことになる。困難な暮らしに喘いでいる人間を見捨て、過労で自死に追い込まれる国において、人間を大切にす国になるための問題提起を率直にしてみたいと考えている。

単著書は、あらためて数えてみると21冊、編著12冊、共編著14冊、共訳書2冊などとなっている。共著は、ここでは省くことにするが、『子ども白書』、辞典・事典の編集と分担執筆、そのほかにも講座・シリーズの編集、雑誌の連載も行ってきた。

今後の研究課題と展望にふれて、10年が研究のできる期間と想定して、前半の5年間で、①沖縄戦と孤児院研究を継続し、一定のまとめをしたいと考えている。並行して「戦争孤児たちの戦後史研究会」を仲間たちと、3年間で『戦争孤児たちの戦後史』全3巻を求める予定である。②厚生労働省の提示している社会的養護の体系再編（家庭的養護の推進）に対する批判的研究をまとめたいと考えている。里親制度の拡充は基本的に具体化されるべきと考えているが、海外の実態を踏まえてみると現在の推進策では子どもの幸せに連結するとは考えられない。③性教育・セクソロジーの分野では、『性的発達論研究』『セクソロジー入門』『幼児期の性教育』『シングルセックス』などをまとめる予定である。④子どもの貧困に関しては、政策提案のとりくみをすすめる予定である。⑤戦争と福祉の関係を問いながら、仲間たちとともに、戦争について書き続けていきたいと考えている。個人では『ボクが戦争に反対する50の理由』などを構想している。⑥許されるなら、『黒糖焼酎物語—酒蔵の想いと歴史』をまとめてみたいと願っている。黒糖焼酎は、酒税法の規定で、醸造は奄美大島に限られている。政治家のなかには、庶民の暮らしをみながら政治を考えていた人たちがいることにもふれてみたい。その点では政治と政治家の劣化がすすんでいることを残念に思う。少なくとも研究者の劣化には異議申し立てをし続け、研究運動を今後とも組織していきたいと考えている。

【単著】

『児童養護の新たな展開—明日をひらく養護実践をめざして』あいわ出版 1987

『性をはぐくむ』あゆみ出版 1993

『子ども虐待と性教育』大修館書店 1995

『児童福祉改革と実践の課題—児童福祉・保育の新時代への提言』日本評論社 1998

『社会福祉基礎構造改革でどうなる日本の福祉』日本評論社 1999

『この国の子どもたちのゆくえ—子どもの現実・虐待・援助の課題』かがわ出版 2000

『新自由主義と非福祉国家への道—社会福祉基礎構造改革のねらいとゆくえ』あけび書房 2000

『セクシュアル・ライツ入門—子どもの性的人権と性教育のための20章』十月舎 2000

『子ども虐待の福祉学—子どもの権利擁護のためのネットワーク』小学館 2002

『市場原理と弱肉強食の福祉への道—「構造改革」は日本の福祉をどこに導くか』あけび書房 2002

『子どもの権利と「保育の質」—保育問題最前線からの提起』かがわ出版 2003

『「次世代育成支援」で変わる、変える子どもの未来—子育てを応援する「行動計画」づくり』山

吹書店 2004

『子どもの性的発達論「入門」—性教育の課題にチャレンジする試論10章』十月舎 2005

『子どもを大切にできる国・しない国—子育てのなかのしあわせ格差を考える』新日本出版社 2006

『保育の底力—子どもを大切にするためのミニマム・エッセンス』新日本出版社 2007

『ヨクアツさがしの子育て論—「子どものしあわせ」格差か平等か』草土文化 2007

『社会保障と保育は「子どもの貧困」にどう応えるか—子育てのセーフティネットを提案する』

自治体研究社 2009

『脱「子どもの貧困」への処方箋』新日本出版社 2010

『沖縄戦と孤児院』吉川弘文館 2016

『戦争をする国・しない国』新日本出版社 2016

『「子どもの貧困」解決への道—実践と政策からのアプローチ』自治体研究社 2017

【共編著】

編著『汚れなき戦士たち—子どもたちの愛と自立 養護施設からのレポート』あいわ出版 1984

シリーズ・十代の性を考える

編著『時代と子どものニーズに応える性教育—統一協会の「新純潔教育」総批判』編著 あゆみ

出版 1993

編著『子ども虐待シンドローム—養護施設から日本の現状がみえる』恒友出版 1995

編著『障害者・マイノリティの性と性教育』あゆみ出版 1995 シリーズ科学・人権・自立・共

生の性教育 21世紀へのヒューマン・セクソロジー

編著『養護原理総論』保育出版社 1997

木下茂幸監修 浅井編著『児童養護の変革—児童福祉改革の視点』朱鷺書房 1997

村山祐一、吉田恒雄共編『日本の保育をどう変えるか—児童福祉法「改正」への緊急提言』かも

がわ出版 1997

奥山真紀子共編『保育者・教師のための子ども虐待防止マニュアル』ひとなる書房 1997

編著『石原慎太郎の「福祉改革」を徹底解剖する—国の政策を先取りする「東京発！市場原理福

祉』あけび書房 2002

佐野英司共編著『現代の社会福祉入門』保育出版社 2003

小賀久、真田是共編『社会福祉運動とはなにか』かがわ出版 2003 講座・21世紀の社会福祉

第2巻

清水玲子、牧裕子、埼玉県保育問題協議会共編『希望としての保育—子どもの輝き、親の思い、

保育者の願い』新読書社 2007

編著『子どもと性』日本図書センター 2007 リーディングス日本の教育と社会 第7巻

編著『シードブック 子ども福祉』編著 建帛社 2007

松本伊智朗、湯澤直美共編『子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために—』明石書店

2008

石川幸枝、樋口和恵共編著『保育者と保護者がはぐくむ「対話のちから」Q&A 55—モンスターペアレント論をこえて!』かもがわ出版 2008

杉田聡、村瀬幸浩共編著『性の貧困と希望としての性教育—その現実とこれからの課題』十月舎 2009

金澤誠一共編著『福祉・保育現場の貧困—人間の安全保障を求めて』明石書店 2009

渡邊保博共編著『保育の理論と実践講座 第2巻 保育の質と保育内容—保育者の専門性とは何か』新日本出版社 2009

丸山美和子共編著『保育の理論と実践講座 第3巻 子ども・家族の実態と子育て支援保育—ニーズをどう捉えるか』新日本出版社 2009

高橋光幸、中村強士共編『保育・子育て政策づくり入門—保育者と保護者がつくる希望のプラン』自治体研究社 2010

編著『シードブック 子ども家庭福祉』建帛社 2011

監修『子どもの暴力対応実践マニュアル 児童福祉施設・児童相談所・学校』茂木健司ほか共著 建帛社 2011

編著『はじめよう!性教育—すべての子どもが性を学ぶための入門書』ボーダーインク 2012

共編『あっ! そうなんだ! 性と生—幼児・小学生そしておとなへ—』エイデル研究所 2014

吉葉研司共編『沖縄の保育・子育て問題』明石書店 2014

浅井、子安潤、鶴田敦子、山田綾、吉田和子共著『ジェンダー／セクシュアリティの教育を創る—バッシングを超える知の経験』明石書店 2006

真田是、小川政亮共著『「社会福死」への道—社会福祉基礎構造改革の問題点』1999 かもがわブックレット

浅井ほか共著『戦争と福祉についてボクらが考えていること』本の泉社 2015

浅井ほか共著『子どもの貧困の解決へ』新日本出版社 2016

浅井ほか共訳『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』明石書店 2017

ほかに共著として執筆したもの、学会誌、専門誌、雑誌などに執筆した論稿もあるが、ここでは紙数の関係で割愛をしておく。

3. 学部のしごと、社会的活動

京都府生まれ。1974年龍谷大学法学部法律学科卒業、76年日本福祉大学社会福祉学部卒業、78年同大学院社会福祉学研究所修士課程修了。東京の児童養護施設で12年間、児童指導員として勤務。98年立教大学コミュニティ福祉学部助教授、2002年に教授に昇格。

私が一番自慢できることは、学部創設の年に、1年生のみなさん、学生課の職員さん、教員とで学園祭「IVY Festa」実行委員会を立ち上げ、成功させたことである。その実行委員会の形式

的にですが初代実行委員長になったことである。来年度は学部創設20年であり、IVY Festaは20回を数えることになる。

2年目には、実習委員長を補佐するために創設された実習教育室長を担当した。

福山学部長時代には、卒業生・在校生・教職員によるコミュニティ福祉学会（通称・学内学会）を設立に関わり、事務局長として運営に関わった。その後、学会誌『まなびあい』（題字は、故・尾崎新先生のもの）の創刊に関わり、編集長の任を担った。

全学教務委員、学部教務委員、福祉学科長、実習委員長などを担当し、2014・15年度は学部長を拝命した。

正直なところ、創設からの10年間は学外で研究と社会活動を自由におこない、後半で“罪滅ぼし的に”大学・学部行政にそれなりに関わらせていただいた。

社会運動としての研究活動

現在、“人間と性”教育研究協議会代表幹事、『季刊SEXUALITY』編集委員、全国保育団体連絡会副会長、日本思春期学会理事、「戦争と福祉」をみんなで考える会代表呼びかけ人、安全保障法に反対する立教人の会共同代表（2017年3月まで）・呼びかけ人、「戦争孤児たちの戦後史」研究会代表運営委員、NPO法人学生支援シェアハウスようこそ理事・事務局長、などにとりくんでいる。

大学を卒業して以降は、どの時期も複数の社会的活動に関わってきた。立教大学に就職してからはさらに活動の幅は大きくなったが、紙幅の関係でここでは割愛する。

ほとんどの時期、忙しさの中で自らが分裂しそうなような感覚のなかで生きてきた。3人の子どもとともに（一人は前に、一人は後ろの座席に、一人は背中にしょって）、夜中に自転車で会議に出かけたときもあった。家族に感謝あるのみ。

自らの人生に誠実でない人間は、他者の人生に対しても誠実なかかわりは持てないものである。人間の発達には、①個のレベル、②集団のレベル、③社会と歴史のレベルでの発達が絡み合いながら豊かにはぐくまれていく。これらを鼎立することは並大抵の努力では実現することは難しい。だから“個人としてできることだけをやる”という個人主義に逃げ込む人もいる。また“一人が10歩進むより、みんなが1歩進む”ためにという誤った集団主義に陥ることもある。さらに根本の矛盾を解決することが大事であるということを優先して（事実上、実践者の使命を軽視して）、政治主義に陥っている現実も少なくない。こうした実践と研究と運動の偏向に抗いながら、私はどう生きるのかを問い続けたいと考えている。

人生は青臭い理想ときれいごとを追い求めることで、人間らしさを持ち続けることができるのではなかろうか。理想を語ることを社会の現実を知らないから……などと“わかったような”ことをいう大人にならないようにしたいものである。事実・真実・現実、に真摯に向かい合うからこそ理想（最も望ましい姿）を語る勇気が湧きたつものである。これからも青臭い理想主義者であり続けたいと思っている。

人生3/4のまとめ—自分らしく生きるということについて—

私が言いたいことはひとつである。信念をもって生きていけば、誰から、どんなことを言われようと、やりたいこと、やるべきことをやっていくことが人間らしい生き方であるということである。研究者然とする方々がさまざまなレッテル張りをすることに何度も出くわしてきたが、私にとってはまったく“ノープロブレム (No problem!)”であった。だって研究や実践の中身に偏向しているということ、真正面から指摘されるわけではないのだから。

私は自らの思想や政治信条に関して、けっして隠したり、装ったりなどしてこなかった。研究者であるのに、公然と自らの思想や政治信条に関して、必要なときに主張できないのは、保身的姿勢と言わざるを得ない。私は社会と政治のさまざまな動向に、批判すべきことは明確に批判し、反対することもはっきりと態度表明してきた。選挙の際などで、依頼をされたときに、支持する政党の推薦にも名前を出したり、推薦文を書いたりもした。研究者として自らの知見に基づいて、意見・態度を表明することは必要なことであると思っている。

とくに言っておきたいことは、学生を戦地に赴かせないための行動は、思想・信条に関わりなく、大学研究者が譲ってはならないことである。信念とは、譲ってはならない思想（行動の指針）を持つことでもある。

「戦争は起こるはずがない」なんて、歴史をみれば言えない！いまの日本は戦争への道を歩まされようとしている。日本は決して戦争をするはずがないと思っている人もいるが、はたしてそうだろうか。歴史を具体的にみると、1894年～2017年の123年間で、日本は6回の戦争にかかわってきた。20年間に1回は他国との戦争をしてきたことになる。

戦後72年間は戦争がなかったが、戦前だけをみれば、51年間で6回の戦争、10年に1回は戦争をしていたのである。戦争をしていた期間はあしかけ25年になる。まさに20世紀も戦争の世紀であった。日本だけでみれば、戦争の世紀をストップさせてきたのが憲法第9条であり、戦争を繰り返させてはならないという国民の声、歴史の希望を凝縮した条文が9条である。

戦後73年、一度も戦争・戦闘に直接的に関わってこなかった国は、ブータンと日本だけとなっている。戦争に参加することになれば、社会福祉・社会保障などは確実に吹っ飛んでしまうことは歴史が証明している。歴史の真実を前にして、誠実に生きたいものである。

でも言う人は言う。まあ、他人の評価や声には耳を傾けることが人生には必要なことだが、気にし過ぎては、何もできないし、本当に自分らしくは生きられない。

私が自分自身を幸せだと思えることは、いい人々と出会ったことである。おそらくいい人々と出会ったと私が思えるのは、同じ方向を見て、現実の出来事に心を痛み、怒りをもって課題に真摯に向かえる人たちと、ともに生きてきたということであろう。

退職するにあたって思うことは、あ～いい人生を送ることができたなあという実感である。これからの自らの人生の10年、20年を展望しながら、真理に向かいて忠実に生きるという人生を全うしたいと思う。そして人生が終わるときに、あ～本当にいい人生を送ることができたと思

たいものである。

末筆になって恐縮だが、立教大学コミュニティ福祉学部の教職員、学生・院生のみなさまには本当にお世話になりました。みなさまとともに学部の一層のご発展を、感謝を込めて祈っております。